

同窓生寄贈作品の修復

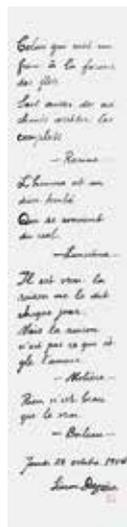
本年も朝日高校では同窓会による母校支援を受け、洋画2点、書道作品3点の修復を行いました。これらは創立80周年記念の美術展・書画展に伴って寄贈された作品群です。油彩画については一連の修復作業のほかに、佐藤一章氏の作品については額の修復も行いました。書道作品はいずれも変色が進んでいたため、洗浄の上、軸装をやり直し、桐箱を新調してこれに収めました。

修復が必要な書道作品は多く残っています。油彩画も後述の若林氏の作品を含めまだ数点残っています。同窓会の皆様には引き続きご支援をよろしくお願いいたします。



作品配列

- ①
②
③ ④ ⑤



若林喜久平先生の復活

若林喜久平先生は昭和21年(1946)9月から25年(1950)3月にわたり、岡山二女、二女高、朝日高で美術の教鞭をとられました。本校は岡中と二女という2つの源流を持ち、併せて150年以上の歴史を有しますが、専任の美術関係教員は10名程度しかいません。先生はその1人です。前号(第23号)の特集記事のための座談会の際にも話題に上っていたと聞き及びましたが、現校地に運び込まれた二女関係の資料は失われているので、同窓会名簿掲載以上の情報を学校は持ち合わせていませんでした。

奇しくも昨年秋、同窓会を通じてご遺族から、さいたま市のギャラリーで「没後13年、若林喜久平遺作展」(会期:平成29年1月23~29日)の開催と作品寄贈の件を聞き、遺作展を訪れる機会を得ました。本校には4点を寄贈して頂けることとなったほか、アルバム等も展示されており、先生の経歴を知ることもできました。二女生の思い出に残る若林先生の経歴と寄贈作品について紹介します。

先生は大正5年(1916)、倉敷市に生まれました。昭和3年(1928)に岡山県倉敷商業学校(現倉敷商業)に入学、5年次に「第五回山陽学生洋画展」(昭和8年1月開催、会場は天満屋百貨店)で千数百点の中から中等部の最高栄位の「山陽賞」を獲得。その作品が今回寄贈の「臺所」で、先生の画家としての出発点となった作品です。『山陽新報』(山陽新聞の前身)には作品の写真や先生のコメントが掲載されています。東京美術学校(現東京藝術大学美術学部)を卒業後、応召。甲種幹部候補生となり、太平洋戦争中は陸軍将校と

して主にマレーシアに駐留していました。水彩画スケッチ2点は昭和17年(1942)の制作と思われ、ペナン付近の海浜風景を描いたものと推測されます。19年(1944)3月に帰国、終戦まで仙台陸軍幼年学校の教官をされていました。

若林先生が二女での勤務を始めた21年9月は焼跡に校舎は復興しておらず、教育会館などに分散しての授業でした。昭和24年、二女高は一高と統合されて朝日高となりますが、この年度は実質的な統合は進まず、翌年度には先生は操山高へ転任されます。そのため、先生が勤務されたのは中山下校舎(旧藩校の校地)、教え子はそのに通った女生徒のみということとなり、このことが本校での印象を薄くしているのでしょうか。その後、上京され、定年まで東京都内の小学校に勤務されています。美術方面でも、自由美術展や読売アンデパンダン展などに出品するなど精力的に活動され、平成16年(2004)に88歳で永眠されました。寄贈作品「碧天」は昭和63年(1988)の作です。

*

恥ずかしながら前述のように、朝日高は岡山二女・二女高に関する資料をほとんど持ち合わせていません。また、昭和30年代前半の資料も大幅に不足しています。同窓生の皆様には校史に関する資料の提供を改めてお願いするとともに、作品を寄贈頂いたご遺族の方に感謝申し上げます。



「戦場にて」(水彩画スケッチ、23.6×30.3cm)



「臺所」(油彩画、90.9×65.2cm)



「碧天」(油彩画、P20号)

作者	題名	形体(大きさ、cm)	写真
寺松国太郎	白衣の人	油彩画(71.6×64.3)	①
佐藤一章	風景	油彩画(31.3×40.0)	②
太宰 施門	フランス語の詩	軸装(139.2×31.1)	③
原 澄治	歩々是道場	軸装(131.9×31.7)	④
和田 博雄	月是故郷明	軸装(121.0×32.3)	⑤